

## 采女祭りとかぐや姫



中秋の名月の今宵、奈良の興福寺の近く、猿沢池のほとりにある采女神社で采女祭りが行われます。

まず、花扇奉納行列。秋の七草で飾られた「花扇」や、御所車に乗った十二単衣の花扇使、古代衣装で美しく着飾ったミス采女や、ミス奈良のネエちゃん達の行列が三条通りを練り歩き、最後に采女神社に花扇の奉納がある。これが花扇奉納神事でいわば昼の部、なんといってもクライマックスは夜の部で、采女たちや花扇使を乗せた二艘の船が、優雅な雅楽の調べの中、満月と松明の篝火に照らされて、猿沢池に浮かぶ幻想的な「管弦船の儀」です。

池の向こう岸では、この感動的な光景と熱爛に酔いしれた観客が池に落ち、幸いお祭り気分で集まっていた亀たちに助けられたりしています。ここの亀は、時々人命救助で集団表彰されたりするんです。最後に池の真ん中で「花扇」を水面に浮かべ、遠い昔にこの池に入水した采女の霊を慰めるのです。

采女祭りは、奈良時代の帝（みかど）の寵愛が衰えたことを嘆いて身を投げた采女の霊を慰めるための祭りで、謡曲〔采女〕はこう伝えています。

『昔、猿沢池の辺で、一人の女性が諸国遊歴の僧に読経を願い出る。僧が理由を尋ねると、「昔、君寵の衰えたと思った采女がこの池に身を投げました。私はその幽霊です」と言って池の底に入ってしまった。僧が手厚く申うと、その采女がもう一度現れて、「おかげで成仏することができました」と喜びを述べ、

拍子を揃え、袂をひるがえして、遊樂快然たる采女の衣ぞ妙なる  
と舞を舞って、また池に戻って行った』

なるほど、采女祭りの由来は分かったけど、この采女の話、なんかひっかかるんですネエ。男の愛が衰えたぐらいでいちいち自殺してたんじゃ、世の中の女性はみんな自殺しなきゃならんでしょう。例えばですね、采女は自殺したんじゃなくて、自殺するように仕向けられたんじゃないでしょうか。要するに自殺じゃなくて他殺です。でも相手は帝ですからね。事の真相は闇から闇に葬られた。そして、采女の運命を哀れんだ人々の涙が、美しい説話を生んだ　とは考えられないでしょうか。

ところで、もうひとつ帝が出てくる有名な説話を僕達は知っています。

「竹取物語」。紫式部が物語の出で初めの祖（おや）といったこの美しい物語には、実は采女祭りの采女の秘密を解き明かす歴史の真実が隠されているんです。

かぐや姫、竹から生まれた絶世の美女、彼女に心を寄せる5人の貴公子たち、そして「帝」。かぐや姫は貴公子たちの求婚に次々に難題を与え、さらには「帝」の求愛さえも振り捨てて、仲秋の名月の今宵、竹取の翁とおうなに

別れを告げて、月の世界へ帰っていきます。

この「竹取物語」が成立したのは奈良時代の初めといわれていますが、実はモデル小説だという説があるのをご存知ですか。かぐや姫に求婚する5人の貴公子たちにはそれぞれモデルがあって、その中の一人「車持皇子(くらもちのみこ)」は蓬萊の玉の枝を探して、遠く唐の国に旅立つ人物ですが、この人物は藤原京の時代の権力者、藤原不比等がモデルだといわれています。

そして、他の人物も同時代の宮廷の貴族たちがモデルなんです。例えば、南海に龍の首の珠を探しに行く大納言大伴御行(おおとものみゆき)は大伴宿禰御行、天竺に火鼠の裘(かわごろも)を探しに行く右大臣阿部御主人(あべのみむらじ)は、阿部朝臣御主人というわけです。

「ということは、金田一さん、「帝」のモデルは藤原の宮に都があったころの天皇であった人物と考えていいんでしょうか」

そうです。そして、それに該当する人物はたった一人、最愛の息子、草壁皇子に先立たれた持統天皇が、最後の望みを託した孫、軽皇子・文武天皇こそが「帝」の正体なんです。

「なるほど、皇孫ニギノミコトという訳ですか。でも、かぐや姫は帝、いや文武天皇の求愛を避けて、月へ帰る必要があったんでしょうねえ」

それはかぐや姫のモデルが、帝の愛を決して受け入れてはならない女性だったからとは考えられないでしょうか。

ここに、一人の女性が登場します。「藤原宮子」、左大臣藤原不比等の娘、文武天皇の妃、史上初めて臣下の身分から皇妃となる女性で、首皇子、後の聖武天皇の生母になる女性です。しかし、彼女は、決して幸せな女性ではなかった。運命の子を身ごもった彼女の産屋の外に、毎夜、魔女たちが訪れ、こう囁きかけるのです。

トントントン、トントントン、お前は呪われた子を産むよ、その子はやがて、お前たちの罪を一身に背負って、大きな仏を造るのさ。それから、お前の夫の帝はもうすぐ死ぬよ。24歳という若さで死ぬよ。そして、お前は、長い長い時間、誰にもあわず、誰も訪れることのない、暗い部屋に閉じ込められて狂っていくのさ。わが子にも会えず狂っていくのさ。みーんな、お前の父親のせいだね。薄汚い獣の血を引くお前を、帝の妃といつてもない地位に上らせ、見果てぬ権力を得ようとしているお前の父親のせいだよ。お前のせいで犠牲にされた沢山の采女たちの恨みのせいだよ。

トントントン、トントントン。お前は覚えているだろう。お前なんかは及びもつかない高貴な血をひく姫とその弟の悲劇を。故なき反逆罪で二上山に葬られた皇子の恨みを。それもみんな、お前のせいなんだよ。

トントントン、トントントン。

さあ、そこで、問題のかぐや姫のモデルですが、ポポア・ポコのみなさんなら魔女たちの呪いの言葉の中に、かぐや姫の秘密が隠されていたことに気

づかれたでしょう。そうなんです。悲劇の皇子、大津の皇子の姉の大伯皇女（おおくのひめみこ）こそ、かぐや姫の正体です。かぐや姫、つまり大伯皇女は帝の求愛を拒んだのではなく、求愛を受けることを許されなかったのです。天武天皇を父に持ち、天智天皇の娘を母に持つ彼女は、その高貴な生まれ故に子を産むことを許されなかったのです。かぐや姫が月に帰るように、彼女は生まれながらに、伊勢神宮の斎宮にならねばならなかったのです。

うつそみの 人なる我れや 明日よりは 二上山を 弟背と我れ見む

万葉集に残された大伯皇女の絶唱。去年の秋、ポポア・ポコの例会で訪れたかぐや姫の故郷、奈良県広陵町の讚岐神社。ここからは見える「ふたかみ山」が、大きく、気高く、そして限りない悲しさに包まれて見えるのは、あまりにも明るい今宵の月のせいかもしれません。

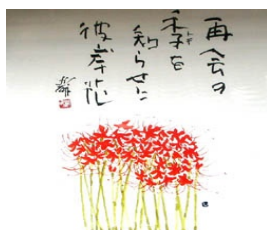
それで、采女祭りの采女なんです、まあ、中には帝の愛が衰えたといって、池に身を投げるオッチョコチョイもいたんじゃないですか。

### 9月13日 葛城道

昔ね、ある人が苦勞して、山の中の芦原を開墾して田を開いたんですね。ところが秋になったら山から夜刀（やと）の神が降りてきて、せっかく実った稲田を荒らしてしまった。夜刀の神というのは頭に角がある蛇のことで。そこでこの人は、山の端に柵を作って、夜刀の神にこう言ったんです。

「ここに境界を設けよう。ここから上はお前たちの土地だから、私はみだりに踏み込んだりしない。だからお前たちも私の田を荒らさないでくれ」すると、次の年から夜刀の神は田を荒らしに来なくなった。そこで、この人は境界の柵のところ小さな祠を建てて、その年の収穫の一部を供えて夜刀の神に感謝をしたんです。

古代の社（やしろ）と、神々の森、そして実りの秋を迎えた棚田の続く葛城の道を歩きながら、僕はこの話を思い出していました。昔の人はこんなふうにして神様と一緒に生きていたんだと思うんです。杉林の急坂の上に開けた高天原は、太古の昔には、神と人が一緒に暮らした場所だったのかもしれないですね。



ところで、この日馬場先生は8時半には御所の駅について、ポポア・ポコの皆さんが到着するまで、1時間も待ってられたのをご存知ですか。実は馬場先生はJRで来られたんです。JRの御所の駅は国道を挟んで向かいにあるんですが、先生が乗られたのは王寺駅8時08分発の和歌山線で、その次は9時26分発、これだと御所に着くのが10時になってしまうんです。実に、1時間半に1本しか走ってないんですね。

ところで、この電車は和歌山線というぐらいだから和歌山まで行きます、御所からさらに南へ下って、吉野口から五条へ出、紀の川沿いに橋本を通って和歌山まで。でもねえ、和歌山と言われたってねえ。岡山よりかは近いけど、奈良盆地の真ん中に住んでる人間には、ピンとこないんですよえ。

そこで考えたんですが、王寺から五条までは「葛城線」という名前に変えたらどうでしょう。王寺の駅を出発してからこの電車が走るところはズットズット葛城です。車窓に見えるのはどこまで行っても葛城の山です。線路は葛城の平坦な大地をどこまでも続いています。悲しいまでに葛城は広い。悲しいまでに葛城の空は大きく、高い。

五条の手前の駅が「北宇智」で、ここで金剛山の山裾を回って、そこから一気に五条に下ると、そこはもう葛城ではなくて西吉野。だから「北宇智」が葛城線の終点です。

昔、といっても5年ほど前ですが、この駅にはまだスイッチバックがありました。スイッチバックってご存知ですか。機関車が急な坂を上るとき、シンドイので行ったり、来たりしながら上っていく。ユラユラユラユラ揺れながら、ゆっくりゆっくり上っていく。今日みたいに天気の良い日は、駅に止まるのを忘れてしまって、どこまでもどこまでも上っていく。あれ、先生、馬場先生、ダメじゃないですか、もう、御所の駅はとっくに通りすぎて、ほら、ポポア。ポコの皆さんが、遥か下にあんなに小さく見えて、この電車はどこまで登っていくんのかって - - ?、そりゃ、やっぱり、高天原じゃないですか。

